

フィールドワークで 何がみつかるか

中山俊秀 なかやま としひで / AA 研

フィールドワークは、物や情報の収集だけの話ではなく、
自分を変える旅なのだと思う。その本質は自分の常識の枠から
自分を解き放ち、新しい自分の世界を作ることであり、
知識体系の拡大・変質にある。



墓地にたてられたトーテムポール。ポールには家系に代々伝えられてきた伝説や家の氏族系統など、いわば家の歴史が刻まれている。

生きた言葉に触れるフィールドワーク。知れば知るほど分からないことが増えていく気がする。言語の動きを「見切る」ことは難しい。



ヌーチャーツヌシの子供たちが演じる創造伝説の劇。この世の動物たちと人間がどのように創られたのか、世界創造の物語もまたわれわれのそれとは違う。



専門とするヌーチャーツヌシ語の調査のためフィールドワークに行くようになってからもう17年になる。「フィールドワーク」というとジャングルの奥地でワニに狙われながら川を渡ったり、灼熱の砂漠地帯を砂まみれになりながらジープを飛ばしたりというような光景が思い浮かぶかもしれないが、私が向かうのはカナダ南西端バンクーバー島、大きなスーパーも何軒かあるし、マクドナルドだって2軒あるフツウのいなか町だ。インディ・ジョーンズの向こうを張るような冒険心はいらない。

言語学のフィールドワークが主な目的とするのは、聞き取り調査や会話などの録音・録画によって単語や表現の例、また人々が言葉をどのように使っているかのデータを集めることだ。ヌーチャーツヌシ語のようにこれまでの研究資料が非常に少ない言語の研究では、とにかく言語事実に関するデータを増やすことが必要で、そのためにフィールドワークは欠かせない。

フィールドワークはつらいよ

観光ルートから外れた小さな町や奥地などに、比較的長期にわたり滞在して、様々な人から話を聞いて歩いたり、いろいろな場所を訪ねたりする、というと端からはおもしろそうに見えるかもしれない。しかし、たいていの「おもしろそうなこと」がそうであるように、フィールドワークもなかなか一筋縄ではいかない仕事だ。調査旅費の捻出など先立つもの話もちろんだが、より複雑なのはコミュニティとの関係だ。

言葉のような社会活動の調査では特に言えることだが、入っていくフィールドは物理的場所ではなく、独自の伝統と社会活動、そして複雑に入り組んだ人間関係のネットワークとが織りなす「文化空間」だ。こうした文化空間の中で行うフィールドワークでは、目的地に車で乗り付け必要なものを拾い集めてきて任務完了というような訳にはいかない。必要なデータの収集には調査する言語の話し手に協力してもらわなくてはならないが、その前にまずコミュニティの中に迎え入れてもらう必要がある。時間をかけて人間関係を

作り「外からの闖入者」たる自分に社会的な「居場所」を認めてもらうのだ。特に少数民族のコミュニティは「狭い社会」なので、「とんでもないよそ者」という噂はすぐ広がる。長期にわたって調査につきあってもらうには良い人間関係は不可欠だ。人間的現象を対象とするフィールドワークではこの部分が一番の難所といってもいいだろう。

データの収集にしても、言葉が文化空間の中に位置づけられた現象であるがゆえのむずかしさがある。たとえば、ヌーチャーツヌシのお話や歌の中には、先祖が儀式や夢のお告げなどを通して神や精霊から譲り受け代々家宝として受け継がれてきたものがある。こうしたお話や歌は正統な所有者以外が話したり歌ったりすることは許されない。「モノ」として考えるとたかがお話、たかが歌、減るわけでもあるまいに、と思ってしまうがちだが、こうしたお話や歌はヌーチャーツヌシ社会の中で単なる言葉の塊以上の重要な意味を持っている。「単なる言葉の塊」自体を集めることを目的とする調査であってもそうした意味づけから離れられるわけではない。「学問のため」などという論理を振りかざして「世の中の道理」を曲げようとしては調査は長く続けられない。

フィールドワークで見つけるもの

言語研究のフィールドワークで集めるのは言葉のデータだ。典型的な「成果」はフィールドノートに書き取った単語や文例、言葉のコミュニケーションの様子を捉えた録音や録画のかたちをとる。こうしたモノ的成果がフィールドワークにとって重要であることは言うまでもないが、フィールドワークの意味はそうしたモノを生むことだけではない。情報や知識そのものについて言えば、インターネットの進化などにより、自分の部屋を出なくても世界の裏側の小さな集落に関する詳細な情報を集めることもできるようになった。では、フィールドワーカーはもはや苦勞してフィールドに足を運ぶ必要はなくなってきたのか。

実はいわゆる「成果」、「データ」とされるものに記録されないものは



このコミュニティ（ツィツシャート）で100年ぶりに立てられた新しいトーテムポール。急激に失われつつある伝統文化を新しい時代に向けて再生させていこうとする意気込みが感じられる。

浜辺にたつウェルカム・ポール。コミュニティがある入り江に入ってくる来訪者を迎える。彼らの文化空間への入り口だ。

カナダ西海岸地域の自然は恵み深い。豊かな海の幸と深い森林はヌーチャツヌシを含めた先住民の伝統社会・文化の発展をなくんだ。

たくさんある。その最たるものはコンテキストだ。ここで言うコンテキストは調査の中での話の文脈のみならず、調査の場面を取り巻いている状況、人間関係、社会的な背景なども含む広い意味での環境のことだ。こうしたコンテキストは我々の言葉の使い方と大きな関わりがあり、その言語表現がなぜ使われたのかを考える上で重要な要因なのだ。しかしながら、「言語データ」とされる記録には、コンテキストに関する情報はほとんど記録されない。その理由は、これまで言葉の研究においてコンテキストの役割がよく理解されてこなかったこと、コンテキストというものがあまりに漠然としていて何をどのように記録してよいかかわりにくいこと、などにある。

理由はどうあれ、言葉の使い方に関する重要な情報の一部が、調査結果としての記録、データでは捉えきれないとすれば、やはり「生の状況」をこの目、この耳で捉えに行くしかない。

フィールドワークの宝：「負ける」経験

フィールドワークの場には直接見聞きすることでしか得られない知識がある。その中でもっとも重要なものは、分厚い語彙のリストでもなく、何十時間分にもなる昔話の録音でもなく、言語という現象、システムの複雑さ、豊かさ、奥深さに対する深い驚きと畏敬だと思う。

規則性を見つけて説明をつけ、言語を見透かしてやろうと思って臨むが、必ずといって良いほど例外や違ったパターンが見つかり、そうは問屋が卸さない、とすり抜けられてしまう。「言語には勝てない！」—フィールドワークではそんな実感の繰り返しだ。言語のパターンは多くの要因が複雑に絡んで形成されていて、しかも機械仕掛けのシステムのように100%の規則性で動く部分はまずない。外国語を習った時にどんな文法規則にも例外があってイライラした覚えもあるだろう。言語は機械仕掛けのからくりというよりも気ままな生き物のようだ。

こうした言語の使われ方の実際を見ずに、自分の頭の中だけで言語と

はこう動くものだろうと考えていると、言語の豊かさ、奥深さ（そして手に負えないさ）を過小評価してしまいがちだ。我々の想像は、どんなに想像力が旺盛でも、自分の経験に基づいた想像でしかない。心底驚くようなことは想像できないものだ。私は、フィールドワークで「言語には勝てない！」と繰り返し感じる中で、自分の「常識」の限界を強く意識し、そのたびにその常識の地平を広げ新しい見方をしてみようとしてきた。フィールドワークの過程で起こる、こうした考え方の枠組みの再編の大切さは、調査で得られたデータによる知識量の増加などは比べものにならない。

自分を変える体験としてのフィールドワーク

フィールドワークはたいてい何らかの物や情報を収集するために現地へ赴く活動として考えられる。しかし、フィールドワークは、物や情報の収集だけの話ではなく、自分を変える旅なのだと思う。生の活動、営みがおきている場の中に身を置いて、自分の常識の枠から自分を解き放ち、そこでおきていることを自分の世界に関連づける、そしてそれを通して新しい自分の世界を作る。フィールドワークの本質はそういう自分の知識体系の拡大・変質にある。

この世の中に驚く余地がある限り、フィールドワークは重要な活動だ。そしてこれは研究者だけのものでもない。自分の日常をちょっと離れて見慣れない営みの中に身を置き、自分の常識で意味づけるのではなく、その営みが理解できる他の視点を探してみる。そのとき、新たなフィールドワークが始まる。